

アビダルマ仏教における三無漏根

齋 藤 滋

1. 問題の所在

三無漏根とは二十二根中の未知当知根 (*anājñātamājñāsyāmīndriya*)・已知根 (*ājñendriya*)・具知根 (*ājñātāvīndriya*) の総称であるが、「阿含・ニカーヤ」にも散説されていることから、古くから説かれていた教理である¹⁾。これまでのアビダルマ仏教研究では、この三無漏根、あるいは、二十二根について顧みられることはほとんどなかった²⁾。このことは、世親著 *Abhidharmakośabhāṣya* (『俱舍論』以下、*Akbh.* と略) 等の論書では、二十二根が教理の上では重要な機能を果たしていないことに起因するものである。本稿では、三無漏根についてあらためて精査し、説一切有部のアビダルマ思想史における新たな知見を示したい。

2. *Akbh.* における三無漏根

はじめに、*Akbh.* によって三無漏根を確認しよう。*Akbh.* には、

意・楽・喜・捨と信などの五〔根〕がある。これら九根は、三道では三〔無漏〕根と称される。見道では未知当知根 (*anājñātamājñāsyāmīndriya*)、修道では已知根 (*ājñendriya*)、無学道では具知根 (*ājñātāvīndriya*) と〔称される〕。(*Akbh.*, Pradhan 1st ed., p. 42, 8-10)

とあり、見道・修道・無学道のそれぞれに対応して未知当知根・已知根・具知根が規定される。また、三無漏根は実体として存在せず、二十二根中の意・楽・喜・捨・信・勤・念・定・慧の九根の集合であると規定されている。

3. 『法蘊足論』における三無漏根

『法蘊足論』における三無漏根の記述をみてみよう。すなわち、

未知当知根とは何か。正性離生に入るものが所有している有学の慧・慧根、および、随信・随法行のものが、四聖諦について未だ現観せず、現観により、諸根が転じる。これを未知当知根と名づける。已知根とは何か。已に四諦を見たものが所有している有学の

(172)

アビダルマ仏教における三無漏根（齋 藤）

慧・慧根、および、信勝解・見至・身証のものが、四聖諦について既に現観し、[今も] 現観し、残っている煩惱を断じるので諸根が転じる。これを已知根と名づける。具知根とは何か。阿羅漢が所有している無学の慧・慧根、および、慧解脱・俱解脱のものが、四聖諦について既に現観し、[今も] 現観し、現法楽住を獲得するので、諸根が転じる、これを具知根と名づける。（『法蘊足論』巻 10, 499, c.）

上記の記述では、未知当知根は「見道にある有学の慧・慧根と、随信・随法行の有学にとって四諦の現観によって転じるころの諸根」であり³⁾、已知根は「修道にある有学の慧・慧根と、信勝解・見至・身証の有学にとって四諦の現観によって転じるころの諸根」であり、また、具知根は「無学である阿羅漢の慧・慧根と、慧解脱・俱解脱の無学にとって四諦の現観や現法楽住の獲得によって転じるころの諸根」と規定されている。

4. 『品類足論』における三無漏根

『品類足論』では三無漏根を次のように述べている。すなわち、

未知当知根とは何か。謂わく、正性離生にすでに入った人、すなわち、諸有学の慧・慧等の根があつて、これらの諸根によって、随信・随法行のものが、まだ現観していない四聖諦について現観することができる。これを未知当知根と名づける。已知根とは何か。謂わく、具見したもの・すでに現観した人、すなわち、諸有学の慧・慧等の根があつて、これらの諸根によって、信勝解・見至・身証のものが、すでに現観した四聖諦において、上勝所証の功德に趣く。これを已知根と名づける。具知根とは何か。漏尽の阿羅漢、すなわち、諸無学の慧・慧等の根があつて、これらの諸根によって、慧解脱・俱解脱のものが、現法楽住を獲得する。これを具知根と名づける。（『品類足論』巻 8, 723, b-c.）

上記の『品類足論』の記述は、『法蘊足論』のものと非常によく似ている。三無漏根の中心に「慧・慧根」を据え、見道に未知当知根、修道に已知根、無学道に具知根が配されるため、『法蘊足論』と本質的に変わるものではない。しかし、『法蘊足論』では、「慧・慧根」、そして、「転じる諸根」と二種になっていたが、『品類足論』では「慧・慧等の根」となっているところが異なっている。『品類足論』は「転じる諸根」を「慧等の根」の「等」の語に含めていると考えられる⁴⁾。

5. 『大毘婆沙論』における三無漏根

次に『大毘婆沙論』の記述を、未知当知根を例にみてみよう。すなわち、

問う。未知当知根とは何か。答える。「未見諦者」・「未現観者」の、諸学の「慧・慧根」、および所有の根であつて、随信行・随法行のものが四聖諦について未現観のものを現観

することができる。これを未知当知根と言う。（『大毘婆沙論』巻142, 732, c.）

と述べている。この記述は、先述の『法蘊足論』や『品類足論』のものと類似している。しかし、問題となるのは、注釈である。『大毘婆沙論』には、すなわち、

この中で、四聖諦について未だ見ることを完了していないゆえに、「未見諦者」と名づける。未だ現観を完了していないゆえに「未現観者」と名づける。「諸学の慧・慧根」とは、これは慧根を説く。「および所有の根あって、随信行・随法行のものが四聖諦において未現観のものを現観することができる」とは残りの八根を説く。これら九根を合わせて未知当知根という。（『大毘婆沙論』巻142, 732, c.）

とある。ここでは、「慧・慧根」を慧根と解釈し、「所有の根」を残りの八根と解釈している。八根は「意・楽・喜・捨・信・勤・念・定」である。そして、九根の集合が未知当知根であるとしているのである。なお、「慧・慧根」を「慧根」とし、「所有の根」を「八根」とするのは、已知根と具知根についても同様である⁵⁾。

『大毘婆沙論』における三無漏根の記述の特徴は、前半部分を「慧根」とし、後半部分を「意・楽・喜・捨・信・勤・念・定」とし、三無漏根が九根の集合であることが強調されていることである。したがって、『大毘婆沙論』における三無漏根は *Akṛbh.* と同じであり、「慧・慧根」を中心としている『法蘊足論』や『品類足論』の三無漏根と明らかに相違している。

6. 三無漏根の存在様態

三無漏根は「阿含・ニカーヤ」にも認められる仏説である。パーリ論書では出世間道での「慧」と規定されているため⁶⁾、三無漏根の「体」は、元来、「慧」であった可能性が極めて高い。そして、先学の指摘にあるように、『法蘊足論』では付随する諸根も含めるようになったのである⁷⁾。したがって、三無漏根を「意・楽・喜・捨・信・勤・念・定・慧」の九根の単なる集合とする『大毘婆沙論』・*Akṛbh.* の定義は明らかに部派における思想の発展の影響を受けたものである。

三無漏根の存在様態をめぐっては、説一切有部内で議論があった。この議論については、『尊婆須蜜菩薩所集論』に跡づけることができる⁸⁾。『尊婆須蜜菩薩所集論』には、未知当知根を例に三種の見解が提示されている。第一に未知当知根は慧根のみと包摂があるという見解、第二に未知当知根は「意・楽・喜・捨・信・勤・念・定・慧」の九根と包摂があるという見解、第三に、ダルマトラータの未知当知根は未知当知根とのみ包摂があるという見解である。このように、三無漏

根について部派内で種々の見解があったが、『大毘婆沙論』では二十二根の存在をめぐる議論のうちで、三無漏根の「体」を次のように規定する。すなわち、

問う。二十二根は名前としては二十二あるが、実体としてはいくつあるのか。答える。対法者は言う。名前としては二十二だが実体としては十七である。（中略）問う。どうして三無漏根は別の体が無いのか。答える。この三〔無漏根〕は、すなわち、次の九根と包摂があるからである。「九」とは、意根・楽〔根〕・喜〔根〕・捨根・信等の五根をいい、この九根について、有る位では未知当知根と名づけられ、有る位では已知根と名づけられ、有る位では具知根と名づけられる。すなわち、見道位・修道位・無学道位である。（『大毘婆沙論』巻142, 730, a-b.）

ここでは、名前・実体（*dravya*）という基準に基づき二十二根が分析され、三無漏根は九根の集合であるため、実体としての存在ではなく、名前のみの存在ということが述べられている。

『大毘婆沙論』・*Akbh.* では、三無漏根を九根の集合としていたが、この見解は、明らかに「実体（*dravya*）」という基準によって判別された結果であるといえる。

7. 結

本稿では、説一切有部の論書における未知当知根・已知根・具知根の三無漏根をみてきたが、三根が見道・修道・無学道のそれぞれに対応することはいずれの論書でも一致していた。しかし、三無漏根の「体」については見解の相違が認められた。『法蘊足論』・『品類足論』では、三無漏根は慧・慧根と付随する諸根と規定されていた。一方、*Akbh.*・『大毘婆沙論』では、三無漏根は意・楽・喜・捨・信・勤・念・定・慧の九根の集合であり実体として存在しないと規定されていた。この相違の背景には部派における思想の発展が存在する。すなわち、説一切有部では、『尊婆須蜜菩薩所集論』にあるように、三無漏根の存在様態について種々の見解があった。その後、「実体（*dravya*）」に基づいた存在様態の分析によって、三無漏根は九根の集合で実体として存在しないという決定をしたのである。

初期の説一切有部は、二十二根を五蘊・十二処・十八界のように重視していた。しかし、部派が判別基準に「実体（*dravya*）」を導入して以後、二十二根は時代遅れの教説として位置づけられるようになったのである。それゆえ、諸論書における三無漏根の相違は、部派が「実体（*dravya*）」によって教説を取捨選択した結果であり、説一切有部のアビダルマ思想が転換した一例証とみなすことができる。

1) 「阿含」では、『長阿含經』巻8「衆集經」, 50, b, 『佛說大集法門經』巻上, 228, b, 『雜

阿含經』卷26「642經」, 128, a. また, 「ニカーヤ」では, *SN.*, vol. 5, *Indriyasamyutta*, pp. 193-253, *DN.*, vol. 3, *Saṅgītisuttanta*, p. 219 等. 2) 二十二根については, 水野弘元〔1966〕「indriya について」『印度学仏教学研究』7-2, 39-46, 櫻部建〔1969〕『俱舍論の研究—界品・根品—』法蔵館, pp. 118-121. なお, 三無漏根に限っては, 水野弘元〔1970〕「原始仏教および部派仏教における般若について」『駒沢大学仏教学部研究紀要』23, 13-42 に詳しい. 3) テキストでは「慧慧根」とあるが, 他の根の記述を参照するに, この複合語は「慧」・「慧根」という類義語の列挙と考えられる. そのため, 本稿では「慧・慧根」と表現する. 4) なお, この箇所では「慧等の根」について具体的な説明はないが, 二十二根と三科（十八界・十二処・五蘊）との包摂関係を述べる箇所では, 三無漏根は, 「三界・二処・三蘊に包摂する（『品類足論』卷18, 769, b.）」と述べられている. *Akḥh.* に従えば, 三界は眼界・法界・意識界, 二処は意処・法処, 三蘊は受蘊・行蘊・識蘊であろう. 5) 已知根については, 『大毘婆沙論』卷143, 733, b. 具知根については, 『大毘婆沙論』卷143, 733, c. 6) *Vibhaṅga*, PTS ed., 124 等. 7) パーリ論書・『法蘊足論』・『舍利弗阿毘曇論』における三無漏根の概念の相違については, 水野弘元〔1970〕「原始仏教および部派仏教における般若について」『駒沢大学仏教学部研究紀要』23, pp. 14-15 ですでに明らかにされている. 8) 『尊婆須蜜菩薩所集論』卷9, 794, b.

〈キーワード〉 未知当知根, 已知根, 具知根, 説一切有部, 二十二根

(名古屋大学非常勤講師, 博士(文学))

新刊紹介

三友 健容

『アビダルマディーパの研究』

A5 版・1,160 頁・本体価格 13,000 円
平楽寺書店・2009 年 4 月